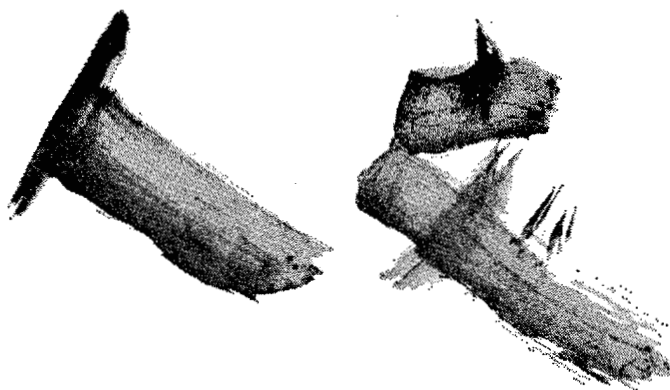


Title	人文 第23号
Author(s)	
Citation	人文 (1981), 23: 1-37
Issue Date	1981
URL	http://hdl.handle.net/2433/57149
Right	
Type	Article
Textversion	publisher



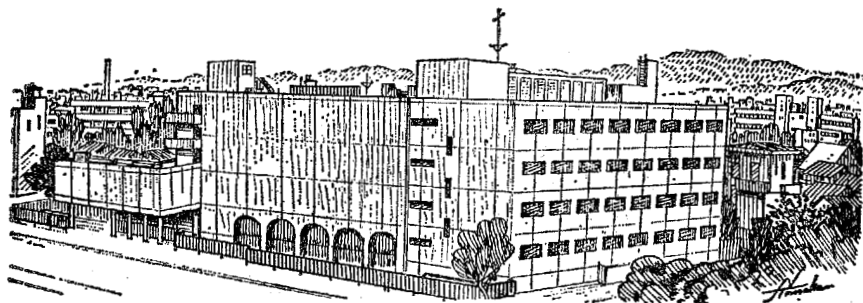
第 二 三 号



1 9 8 1

京都大学人文科学研究所

ISSN 0389-147X



人 文 第二三号

1980年6月——1980年11月

も く じ

随想	渡部 徹	2
印象に残ること		
図形思考	山田 慶児	
アルチュセールの狂気	阪上 孝	
講演		7
夏期講座		
官僚機構とデザイナー	井上 章一	
錦絵の社会史	佐々木 克	
風流人の文学	矢淵 孝良	
天竺をたずねて	桑山 正進	
小説のなかの社会	天野 史郎	
アポリネールと現代	宇佐美 斉	
開所記念講演		
日露戦後の三菱	杉本 俊宏	
歴史家と作家の視点	勝村 哲也	
楽師の社会史	中村賢二郎	
本のうわさ		18
河野健二『西洋経済史』(杉山)・柳田聖山『一休——狂雲集』の世界(宇佐美)・多田道太郎『自分学』(宮崎)・上山春平『哲学の旅から』(羽賀)		
共同研究の話題		22
研究会の話題から	上田 篤	
雄 感	藤本 博生	
国民文化班の現在	飛鳥井雅道	
旅		25
豚とケント(谷泰)・チョウカンデイの墓石群(松井健)・コペンハーゲンの物置(岩熊幸男)・ヨーロッパで(吉田光邦)・パークスタインの西北地方(桑山正進)		
書いたもの一覧(一九八〇年六月——一月)		
人のうごき(17)・お客さま(32)・計報と叙職(21)・感銘をうけた本(32)		33

印象に残ること

渡部徹

——本館建築をめぐる——

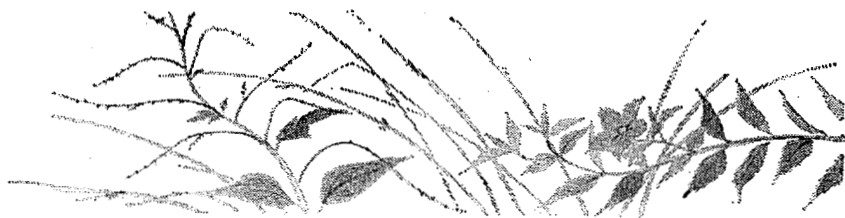
研究所に三二年間も御厄介になったのだから、思い出は尽きないが、さて最も印象に残ることというと、施設実行委員会の責任者をつとめたことで、本館建築とその移転先をめぐることもである。

これについては、山下正男君が『人文科学研究所五十年』の「新館落成」でくわしく書いているとおりであるが、こぼれ話として、苦心と失敗を書きとめておく。

第一は移転先であった。当初の案——結局、そこに落ち着くのだが——は付属図書館別館と石油化学あとの建物であった。ところが、ここはすでに、文学部が陳列館改築中の移転先に予定し、使用不能なことを知らされた。改めて移転先を早急に物色しなければならなかった。『五十年』に記載の建物のほか、修学院、医学部構内の旧薬学教室、病院西部構内の旧小児科隔離病棟、旧京都織物敷地内の保育所あとのプレハブを見て廻った。幸い、七三年はじめ陳列館改築は予算がつかなかったもので、当初の案に落ち着いた。

第二は、移転先の部屋割が厄介であった。いくつもない個室をどう割り振るかである。苦肉の策として、移転期間中、自宅研修希望者を募って切り抜けた。

第三は、新館に東方部のスペースをどれだけ用意するかである。当初案は六階の研究棟であったから、そのうちの一階を使用してもらうことでスナ



りきまっていたが、途中、設計が変更されたから厄介なことになった。当初の一階分の床面積に見合うスペースを分散的に用意することで諒解いただけた。この苦心の一端が、二・三階の西側で廊下を行きどまりにさせることになった。

第四は、新館の部屋割である。難題と覚悟していたが、年長順に選択と、意外にスナリ収った。

悔まれるのは、応接室・会議室にデカイ椅子などを入れたことである。調度品は、七五年に入ってから年度末までに購入することになったが、折からの不況で、入札価格が予定を大幅に下回り、予算消化のため、規格の大きいのに変更して購入したからである。時間的に余裕がないため、岩井事務長から相談をうけたとき、よく配慮せずに独断的に承諾した結果である。不便をおかけしている点、お詫びしておきたい。

図形思考

山田 慶 児

三十年も昔のことだが、微分方程式論の試験のとき、わたしはせっせと記号を操作していた。記号には約束があり、約束にしたがって操作してゆけば、問題は解けるはずなのだ。その最中に、溝畑茂先生の足音がわたしの机の横で消えた。先生は小首をかしげながらわたしの答案をながめておられたが、やがてその両手がゆっくりと動きはじめた。するとどうだろう。手のなめらかな動きがあざやかに、三次元の図形を描き出しているではないか。見えな



い図形を眼で追いながら、そのとき、わたしには突然わかったのである。数学者は、どんなに抽象的な問題にとりくんでいるときでも、決して記号だけを操作しているのではない、図形の生きいきとした空間的イメージに助けられて、抽象的な思考をすすめているのだ、という当り前のことが。

そのささやかな発見はわたしにとって、微分方程式論をマスターするよりもはるかに大きな意味をもつてきこたった。わたしはいつか式を図形として読むことに熱中しはじめていた。計算法などきれいさっぱり忘れてしまったにもかかわらず、いまでも数式の入った本を読むのがあまり苦痛にならないのは、そのせいだ。ウィナーの『サイバネティクス』を、わたしはほとんど興奮しながら一気に読みとおしたが、あんなむずかしい本をまともに理解できるわけがない。要するに、いわば日本語と式の形を交互に眺めていただけのことである。

考えがまとまらないとき、見通しがきかないとき、壁にぶつかったとき、わたしはいつとなく紙のうえに図形を描いている。図が形をとのえてゆくにつれ、思考の風景がひらけてゆく。図形が落着かず、動いているあいだは、まだだめだ。もうこれ以上動かせない図形がすがたをあらわすと、わたしの思考は堰を切って流れはじめる。そしてべつの壁にさえぎられるまで、わたしはその流れに思考をゆだねる。

はじめに書いた話には後日談がある。聞くところによれば、溝畑先生はその後、講義の劈頭にかならず、数学者は図形をイメージしながら考えるという意味のことを、学生に話されるそうである。もう一つ。ある日、山口昌哉さんに会ったら、ニヤニヤしながら、「溝畑さんのエンマ帖にあなたの名前



がのってましたよ」。その成績たるや、眼も当てられないでにきまっているのだ。まったく、山口先生もお人が悪い。

アルチュセールの狂気 阪 上 孝

昨年一月一七日の朝日新聞は、「仏共産党批判の論客が妻殺し？」の見出しで、一月一六日、ルイ・アルチュセールが妻の絞殺死体のかたわらで発見され、ただちにサン＝タンヌの精神病院に収容されたと報じた。一瞬、誤報ではないかと思つたが、そうではないらしい。この記事は、『資本論を読む』などで展開された精緻で迫力に満ちた彼の思想に感銘を受け、いくつかの著作を反訳した私にとって、大きなショックだった。

その後しばらくして、西川長夫さんから、この事件を報じた『フランス・ソワール』と『ル・モンド』のコピーを見せてもらった。奇妙にもというか当然にもというか、『ル・モンド』の記事はアルチュセールがくりかえし重い精神的危機に見舞われていたこと、一月三日に治療のために休暇を申し出ていたことなどを報じるだけのまったく素気ないものだったのにたいして、『フランス・ソワール』は大見出しで事件を報じるとともに、アルチュセールのかなり詳しい経歴と、アルチュセール頌ともいえるほどの業績の紹介を掲載していた。

考えてみれば、この悲劇、アルチュセールの狂気は、予見できないものでもなかったという思いがしてくる。何度も彼を襲った精神的危機、この数年

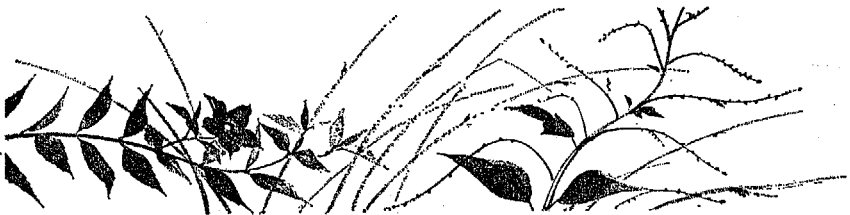


来、共産党内にとどまって徹底した執行部批判を続けてきたことの緊張と困難というようなことだけではない。私のいいたいのは彼の理論の構造自体が極度の精神的緊張を強いるものであったことである。

アルチュセールの理論的営為は、 \wedge 構造による決定 \vee の理論と \wedge 実践の優位 \vee の主張、いいかえれば科学的理論と階級実践を、どちらか一方を切捨てたり、両者の安易な調和を想定するのではなく、ハードなマルクス主義哲学者として、ぎりぎりのところまで追いつめるというきわめて困難な課題を、なうことで成立した。人間主義の立場に立てば、両者のあいだの深淵を、人間とか主体とかのデウス・エクス・マキナの言葉で容易にうめることができただろう。科学主義の立場からは、そもそもこの深淵は問題にならないであろう。しかしアルチュセールは、このような道を自ら禁じた。理論的反人間主義と革命実践の徹底的な追求、これがアルチュセールの選んだ道であった。

そのために彼が直面した理論的困難がいかに大きかったか、またその克服のために彼がいかに苦闘したかをここで述べる余裕はない。ただ、この困難な苦闘のゆえに、アルチュセールの文章はバセチックな明晰さと迫力に満ちたものになり、それが読むものをひきつけたことは間違いない。

アルチュセールの \wedge 事件 \vee は、マルクス主義理論の空前ともいえるべき危機と後退のなかで、きわめて硬質のマルクス主義理論家であるがゆえにおこった悲劇であった。今一度 \wedge アルチュセールを読む \vee ことによって、現代という重い時代とアルチュセールの問題構成を考えたい。



講演



夏期講座（昭和五十五年度）

〈芸術と社会〉

五五年八月一日—三日
於 本館会議室

官僚機構とデザイナー

——妻木頼黄の意匠について——

井 上 章 一

東京の日本橋には、きみょうな青銅彫刻がそなえられている。「きりん像」である。羽をはやした竜のような怪物が、橋からにらみをきかせている。たいへんぎょうぎょうしい意匠だといえる。

これは、妻木頼黄という建築家がデザインしたものである。明治四年のことであった。

妻木の作品は、いっばんに、たいへん大げさである。旧横浜正金銀行の大ドームや、旧東京府庁のうねったような塔など、どれをみても、威圧的なデザインになっている。日本橋の彫刻だけがぎょうぎょうしいのではない。過剰な表現は妻木の作風である。

さて、彼は、ふつうの民間建築家ではなかった。大蔵省につとめる官僚建築家だったのである。当時の官庁営繕は、おおむね彼の監督下にあった。いってみれば、営繕機構の大ボスだったのである。

ところで、明治政府は、国家の近代化を強くのぞんでいた。これは、都市についてもあてはまる。日本の都市に近代的なよそおいをほどこすことは、一つの大きな目標であった。

もちろん、当時の建築家たちは、この目標を達成しようとして努力した。とくに、妻木頼黄のような官僚建築家は、明治国家を飾ることが仕事であった。彼の作品の大げささも、この点とは無縁ではないだろう。国家を飾ろうとする意志が強ければ大げさになるのはあたりまえである。

また、妻木の家は、もともと幕府の旗本であった。だから、明治初期には、かなりの辛酸をなめている。

そうした人物が明治政府につかえるとき、これを大げさに飾りたてることは、しごく自然であるだろう。ある体制にとって部外者である者が、その体制にかえるとき、彼はその体制に不自然なまでにしがみつくものではある。妻木が必要以上に明治国家を飾ろうとしたのも不思議ではない。

だが、そこにある種の皮肉はないだろうか。極端な礼賛は、反語的に侮蔑の意図をふくむものではある。明治に打ちまかされた江戸が明治をほめあげることによって逆説的に明治を愚弄する。妻木のデザインをみていると、このようなことをつい感じてしまうのである。

錦絵の社会史

佐々木 克

現在でこそ、錦絵は美術館や展示会に陳列され、あるいは高額で取引される、観賞すべき芸術品として扱われているが、かつては、庶民のための民芸品であった。木版多色刷の版画は、錦のように美しい、という

事から錦絵とよばれ、江戸期明和の頃からそのスタイルが定着したのであったが、「江戸絵」あるいは「絵紙」などともよばれ、主として江戸土産の民芸品たる性格をもって発達した歴史をもつ。

錦絵は、参勤交代の武士などの土産にも珍重されたが、本来的に庶民が支えたものであった以上、安価なものであったし、また各階層の人びとが親しみのもて、理解できる絵であり画題でなければならなかった。

錦絵はまたニュース性を持っていた。明治期の新聞錦絵が、三面記事的興味で人気をよんだが、幕末においても、大事件は錦絵のかっこうの題材となった。横浜絵とよばれる開港場と外国人風景、あるいは和宮降嫁の絵など多種多様の錦絵が発行され、また芝居絵・役者絵などは、現代における芸能週刊誌の先駆といつてよいだろう。

ところで、幕末から明治の錦絵を見くらべると、はっきりと時代の傾向や制約が表われていて興味深い。幕末期の諷刺やパロディの精神が、明治期になると消滅してゆき、絵もたとえば乗物尽などの絵のように説明的になり単調になる。また絵の質も、幕末期の丁寧な彫と刷が、明治には全体として粗くなる。

それは一口でいえば、変革期の混沌とした時代の自由な精神が、明治の画一化した統制にのみ込まれてゆ

く過程を表わしているといえそうで、ここからも、錦絵が社会の状況を「現画」としたものであると表現出来る根拠があるように思える。

錦絵はとりまいた絵画と違って、庶民感覚のものである。多くの錦絵の点景に登場するコミカルな人物に注目すると、その時代に生きる庶民の体臭までが匂う。カゴや人力車、汽車に乗る人物、將軍や天皇の行列を囲む群集、その絵の中の人びとは、まさに錦絵をみる人びとと同一人格なのであり、彼らは錦絵の人物に同化することによって、新しい世相にとけ込んで行ったのであった。だからこそ錦絵は広く人びとに支持されたのである。

こうしてみると錦絵の社会史とは、錦絵に描かれた社会の諸相を分析し、絵の発想を社会状況の上に位置づけ、その時代の精神世界を探ることにほかならないのである。

風流人の文学

——東晋の社会と文学——

矢淵孝良

短命な王朝が興亡した六朝期にあって、最も長い一世紀余の歴史を有する東晋時代は、こと文学に関するかぎり極めて低調な時代であった。その末期から劉宋にかけて活躍した陶淵明を偉大な例外として、現代の通史的な文学史の書に名を留めるのは、わずかに初期の郭璞ぐらいなものであろう。それは、王朝の交替期にこそ秀れた作家や作品が誕生し易いという中国文学史の特徴を示す一例でもあるのだが。しかし、たとえ第一級の文学者が出現しなかったとはいえ、郭璞から陶淵明に至る東晋の多半の期間、文学が全く空白であったわけではない。個々の作品の巧拙を問わずに、東晋の文学の成果を収めて吟味する必要があるように思われる。

東晋一代の文壇を風靡したのは、玄言詩と呼ばれる老荘の哲学を解釈し讃美する詩である。その流行は、「風流」を尊重し、「清談」をこととする当時の社会風潮の忠実な反映であったが、「詩は志を言う」ものであるとする中国詩の伝統から逸脱し、後世の批評家の手厳しい批判を被る結果を招いた。その批判の厳しさは、何よりも当時の作品の殆んどが散佚してしまっただという事実が証明している。

しかし、王羲之の序で有名な「蘭亭」の詩など、辛うじて散佚を免れた作品を詳細に検討したとき、注目

すべきは、そこに老莊（特に莊子）の哲学の影響を受けて形成された山水観と、それに基づく山水詩の展開が見られることである。従来、山水詩の成立は劉宋の謝靈運を中心に論じられてきた。近來、謝詩の前段階として東晋の玄言詩に注目する学者も増えてきたが、それでは謝の山水詩と東晋の詩人達の作品との間には如何なる關係が存在するのであるうか。

謝靈運が山水詩を創作したのは、むしろ山水の美を愛好したからであるに相違ないが、その愛好は單に情緒的に美に耽溺するという傾向を帯びているものではない。彼は眼前の山水の美に、宇宙の真理ともいふべき「理」の具現を看取し、「理」が現成するゆえに美しい自然に感動して詩作に赴くのである。しかし、それは彼独得の山水観によるものではない。自然の中に「理」の具現を見る山水観は、古く莊子の論に見え、それを意識的に文学作品中に導入したのは東晋の詩人達であった。

謝靈運の山水詩が、如上の山水観の熟成と、それに基づく山水詩の発達を基盤にして成立したものと位置づけられるならば、二流三流の作家達に支えられた東晋文学の文学史上の貢獻は決して無視することができないのである。

天竺をたずねて

—玄奘と光智—

桑山正進

玄奘が原典ヨガチャラ・ブーミに直接当たるため、ナーランダーに渡り、シーラバドラに就いたことは事実である。しかし、なぜナーランダーであったのかは、問われたためしがない。というのは、ナーランダーがインド仏教の傑出した中心になったのは、西北インドがエフタルの占拠によって大乘仏教索源地としての位置を低落してから、すなわち六世紀前半以後のことであり、以後の新事情は伝わっていなかったふしがあるからである。また、玄奘は撰論学派に就学し、その研究に当っては先師を系統的に追う、すなわち源流パラマールタ（真諦）にせまろうとした面がうかがえる。そのパラマールタはヴァラビーの安慧と同門。そこは、ナーランダと並び称されたエフタル以後の中心地で、アサンガ以来の無相唯識の場。対するナーランダーはディンナーガの有相唯識である。その事情を

知っていたらナーランダーに行くであろうか。

中国にエフタル以後のインド新仏教事情が正確に伝わるのは、ブラバーカーミトラ（光智）の来住がいつからである。彼は六二六年末に長安に来て、大興善寺所住となり、勅を奉じてそこで伝訳を創開し、三部三五巻を完了し、六三三年六九才で示寂した。

ブラバーカーミトラは五六五年に中インドのクシャトリヤに生れたから、既にエフタル後の新時代の人である。五七四年出家して大乘經十萬偈を暗誦し、戒律にも博通したが、五九六年ころからナーランダーでシーラパドラに教えを受けている。のちに西突厥統葉護可汗庭の布教を目指してそこに滞在した。統葉護の登位は六一九年頃であるから、ナーランダ就学は相当長かったとおもわれる。ちょうどその頃唐は西突厥と親和し、統葉護の請婚を受諾し、特使高平王道立を派遣したので、王庭でブラバーカーミトラと遇っている。王道立は懇請して武徳九年末に長安に彼を帰したのである。

玄奘の当初計画旅程は、国境を出て伊吾からすぐさま可汗浮図に向うことになっている。統葉護の勢力は可汗浮図からヒンドゥークシュ南麓までおよび、その勢力下の通行がインド到達にとり安全迅速であることを、玄奘は知っていたことになる。この行路を教唆し

たのが、ブラバーカーミトラであることは、玄奘が入手できる範圍の西域情報源を顧みれば、容易に考えられ、同時にナーランダーやそこで玄奘の就いたシーラパドラ、あるいはヴァラビー等の知識をも玄奘は彼から得たとみることが許されよう。

小説のなかの社会

—ブルーストの作品をめぐって—

天 野 史 郎

ブルーストの生きた十九世紀末より今世紀初頭のフランスは、産業革命のうみだした近代工業が一応の成熟をとげ、今日的な物質文明の礎が築かれた時代である。鉄道、自動車、電信、電話、電気製品等、陸統とらみだされる近代工業の産物を前に人々は目を見張らざるを得なかった。誰であれ近代工業との対峙がせまられるこのような社会にあっては、人間の想像的世界にも工業社会の反映が見られることとなるのは必然のなりゆきである。ブルーストの小説しかり。汽車、自動車、自動車が距離感覚をくるわせ、土地の印象をも一変させ

てしまふという、現実世界と想像世界との葛藤を、いわばひとつの新たな感覚世界の出現とみなしブルーストは美しい神話的な叙述を連ねている。『失われた時をもとめて』という小説は、いわば、そのような現実世界と想像世界との関連をいかに位置づけるかという試みでもあるのだが、そのふたつの世界の空間的表現としてブルーストの用いたのが水族館のイメージであるといえよう。

鉄とガラスによる構造体は、いわば十九世紀建築の精髓であり、数次のパリ万博、あるいは百貨店といった十九世紀の新たな社会現象、風俗を彩るものであるが、水族館もまたその列に連なるものである。パリに水族館がはじめてできたのは一八七八年パリ万博の折で、その主会場として建築されたトロカデロ宮にひつらえられた。そしてその後水族館はフランス各地にひるまうていくこととなる。

『失われた時をもとめて』に現れる一番典型的な水族館は、バルベックのホテルの大食堂であるが、ブルーストはこの他水族館と直接名ざさぬまでもオペラ座の栈敷等、明らかに水族館とみなすことのできる空間をいくつもつくりだしている。それらの例からブルーストのとらえた水族館の特徴がひき出される。ガラスの仕切り壁に截然と分かれた二つの空間。しかし、

魚のいる側からは観客の姿が見えず、ガラスの向う側に別の空間があり、観客がそこから自分達の泳ぐ姿を見て楽しんでゐるなぞ魚はつゆ知らない。観客は水族館の視覚装置としての特性を利用し、中の魚を視覚的に支配するが、中の魚は視覚も認識もことごとくうばわれて純粹に受動的な対象としてある。ブルーストはするように水族館の特徴をとらえ、観客の側に自らの視座を据え、それを『私』と呼び、登場人物という魚を観察したといえる。

アポリネールと現代

宇佐美 斉

一九八〇年はたまたまアポリネールの生誕百周年にあたる。二十世紀の幕開きとともに満二十歳を迎えた彼は、ひとつの時代の終焉を見とどけ、新しい時代の胎動をいち早く感知して、その生誕に力を貸した、文字通りの世紀児である。

彼が生きた十九世紀末から今世紀初頭にかけてのヨーロッパは、現代のもつさまざまな特性を、早くも集

約してあらわにしつつあった。すなわち資本制社会の
かつて例を見ないほどの高度成長の時期にあたり、物
心両面において革新と上昇の気運がみなぎっていた時
代であった。それはベル・エポックということばが端
的に物語るように、人々が無邪気に文明に対して信頼
を寄せ夢を抱いていられた、ある意味では幸せな時代
であった。

芸術もまた当然このような時代に鋭く感応して、映
画や蓄音器のような新しい表現手段の出現と相俟つ
て、「世襲財産を棄」てて雄雄しく「発見のために旅
立」ったのであった。なかでも「新精神」の鼓吹者ア
ポリネールは、いわば前衛芸術の旗手であり、後統の
ダダイスムやシュールレアリスムにバトンをタッチす
べき第一走者であった。

アポリネールが試みたさまざまな詩的実験を、要約
的に紹介するスペースすらここでは与えられていない
が、ただひとつ指摘しておきたいと思うことは、この
詩人が一方では伝統的なフランス抒情詩にも、断ちが
たい愛着を抱いていたという事実である。革新への道
を果敢に切り拓いて行くことと、伝統からとるべきも
のを学びとるという姿勢とは、この詩人にとっては決
して、矛盾するものではなかった。おそらくこのこと
は、彼が典型的なコスモポリットであったことと、多

分に関わっているだろう。パリという国際文化都市に
漂着した「無国籍者」の利点は、偏見にとらわれない
新鮮な眼ざしであらゆる事象を受け入れ、取捨選択す
ることができたことであり、加えて、「チョコレート
やコーヒーが味覚の領域を拡張」えたように、異国の
祖先から受けついだ血と幼少期の鮮烈な印象とを持ち
込むことによって、「新しい祖国の精神的な資産を更
に豊かなものにする」ことができたことである。

近年になっていよいよデカダンスの気配を濃厚に漂
わせはじめた「私たちの世紀」を振り返ってみる時、
現代はアポリネールが生きた時代にあらわになりつつ
あったさまざまな特性が、ひとつひとつ収支決算を迫
られて来ている時代であると言っていいたいだろう。アポ
リネールを読み、アポリネールを考えることが、その
まま「私たちの世紀」を総括し、「私たちの時代」を
認識することにつながる、と考える所以である。



開所記念講演

五五年二月一日
於本館會議室

日露戦後の三菱

杉本俊宏

日本帝国主義史研究では、その成立期をめぐる議論の中で財閥資本をどの様に位置づけて捉えるかが、一つの重要な論点をなしていた。重化学工業の発達と独占資本の形成を経済的基盤とした帝国主義の成立という、西欧の先進資本主義国の発展モデルから抽出されたいわゆる古典的な帝国主義理論の枠組では、日本の具体的な現実を十全に把握できないことから、様々な議論が生じていた。また、三井・三菱等の独占的な資本それ自体についても、既成の理論構成の適用という点からすれば、コンツェルン形態という外枠とその金

融資本としての内実とのギャップが問題とならざるをえない。しかし、こうした西欧中心史観的立場を一旦離れて、東アジアの歴史的現実の分析の中から新たな理論構成を生み出していく努力が必要であらう。ここでは、そうした方向への手がかりを探る試みとして、三菱を素材にとりあげてみた。

一九〇〇年代後半の三菱は、「前期的」政商から「近代的」財閥へと変貌をとげつつあった。海運業を中心とした政商的活動により急速に拡大した三菱資本は、鉱山業への進出によって高蓄積をとげ、一九〇八（明治四一）年には、傘下諸事業を独立採算制へと移行させることによって事実上のコンツェルンを形成した。それは、単に日露戦後恐慌とそれに続いた慢性的不況への対応という側面のみでなく、大規模化した傘下諸事業をより合理的に管理してゆくための機構を確立し、とりわけ当時の三菱諸事業の中で、唯一の重工業であった造船業の世界的技術水準への到達と経営確立、さらには関連重工業部門への進出等を指すものであった。

一方、この時期の三菱の対外的活動は、次の様な特徴をもっていた。商品の輸出入においては、自社の石炭・銅の販売を主として、ようやく綿製品等へ手を染め始めた段階で、先行する三井物産の「流通独占」的

商業活動と比べて格段の差があった。また資本の輸出についてみると、肅親王への政治的借款、大治水泥廠への借款等のいくつかの事例が典型的に示しているように、国家権力とその傘下諸機関（正金・製鉄所等）に支援を受けた、政治的色彩の極めて色濃いものであった。

歴史家と作家の視点

勝村 哲也

司馬遼太郎、この筆名は司馬遷を意識したものでありましょう。姓がそうだとすれば、名は、大阪外語の蒙古語科で、遼・金・元の歴史を学ばれたのかかわるのでしょうか。いずれにしても、中国に深い知識をもたれる司馬さんのことから、今評判になっている『項羽と劉邦』の構想も、随分古くから温められていたと思います。しかし軍事的に劣る劉邦がなぜ強い項羽に勝てたのか、史記を読む者が誰しも感ずる、もやもやとした感情が振っされるまで、司馬さんは筆を下さなかった。

今まで歴史家は、史記の高祖本紀に記された、劉邦が語る勝利の弁（祝賀パーティーにおける勝利監督の談話に似る）を率直に受け取って、感情を抑えてきたのですが、司馬さんは、劉邦の言葉の背後に潜むいまいつの真実をとことん探し求め、軍糧調達という視点からそれを見出したのです。項羽に連戦連敗した劉邦は、窮余の策として、広武山に登り、秦帝国の官営穀倉であった敖倉を占拠して、いわば飯櫃をかかえて飯櫃を守る防衛の戦法を採った。劉邦の勝因はここにあるとみるのです。こうした着想を、司馬さんは、洛陽に赴いた一九七五年の五月、含嘉倉と呼ばれる唐代に作られた巨大な地下の官営穀倉をみて、得たといいます。わが国では軍糧調達についての関心が昔から薄かったと、『坂の上の雲』でも書かれています。司馬さんの発想は、日本人がつい見過し、中国人は分りきったこととしてとりたてて考えない、盲点を突いたもので、就糧（就食）といった史書の用語を媒体にせずに、史観にまで高めたのは見事です。唯食史観と名付け得ましょうか。

さて、くだんの劉邦の勝利の弁では、戦いの殊勲者として、張良・蕭何・韓信が挙げられています。司馬さんは、蕭何を劉邦の影のような存在、韓信を根っからの軍人と描いて、劉邦の蕭何観、韓信観と乖離させ

ていません。しかし「籌策^{はかりごと}を帷帳の中に運らし、勝を千里の外に決した」と評する、劉邦の張良^{めぐ}への讃辭に、つっ込んだ分析を加えられないのは意外です。張良は秦の始皇帝に滅ぼされた韓の重臣で、韓への忠誠心が劉邦への傾斜を強めさせるのですが、それと符合するかに、劉邦が項羽との戦いをすべて旧韓の領内で行うようになる事実には注目したいのです。この事実は司馬さんの盲点かも知れません。司馬さんに触発されて想像力を働かせ、劉邦勝利の原因を、張良の執念に求めてみよう、私はいま考えています。

樂師の社会史

中村賢二郎

樂師とは職業的な樂器の演奏者であるが、ここではより幅広い人々を指して用いている。中世ヨーロッパでは狹義の樂師のみを示す言葉はなく、樂器の演奏のほか、歌唱、輕業、手品等さまざまな芸で暮しを立てる人々を *Spilleute, Jongleur* と総称しており、ここでいう樂師も彼らすべてを含めているからである。

彼ら樂師を問題とするのは、ドイツでは彼らはその他のいくつかの職業の人々と共に「賤民」として扱われてきたからであり、この発表もヨーロッパの賤民史に對する関心に発している。

十三世紀二〇年代に作成された法書『ザクセンシュビーゲル』には、樂師が手ひどい侮辱を受けた場合、一般人とは差別された侮蔑的な「見せかけの賠償」を与えられるにすぎないこと、また裁判上の權利・資格で著しい制限を受けることが規定されている。侮辱に對して樂師を無保護に放置する法的な扱いは、北はスカンディナヴィア半島から南はイタリアまで共通して見られたという。このほか樂師の子供はギルドに受け入れられず、また樂師はしばしば教会によってミサから排除され、破門同様の扱いを受けた。これらの差別のうち、裁判上の權利・資格の制限（審判人・証人・弁護人になりえぬこと）と職業選択上の制限は他の賤民にも共通していたが、侮辱に對する法的無保護とミサからの排除という点で、樂師は中世で最も賤まれた職業であったといえる。

樂師および賤民一般に對する扱いは、近世に入るとともに変る。先述のような法的な差別は消滅し、樂師に對するミサの拒否も解除されるが、他方で賤民一般に對する就業上の制限と賤民に對するタブーは強めら

れ、賤民がまともな職業に就くことはますます困難となる。法的な差別は消滅するにもかかわらず、社会的な差別はかえって厳しくなっている。

ただし楽師だけに限っていえば、彼らのすべてが賤民の扱いを受け続けるのではない。王侯の宮廷・館に仕える楽師と都市に定住した楽師は中世末期までに賤民の扱いから脱却しており、なお渡り者の生活を続け

る楽師のみが賤民の扱いを受け続ける。のみならず、彼らは他の放浪者と共に治安上好ましからざる者として、政府から警戒の目を向けられていく。なお、近世において賤民一般に対する社会的差別がなぜ強められていくかは、まだ不明なところの多い社会史・経済史上の問題である。

人のうごき

。村田(旧姓田中)裕子氏を助手(東方部)に採用(七月一日付)。

。谷泰助教授(西洋部)は、六月一六日伊丹発、パリの人類博物館、アルダン、ブカレスト、イスタンブール等でユーラシア西南部有畜社会の比較文化的研究をし、十一月二日帰国。

。園田英弘助手(日本部)は、六月一七日成田発、ハワイ大学、ハーバード・エンチン研究所で日本近代史に関する比較研究をし、五六年七月三一日帰国予定。

。吉田光邦教授(日本部)は、七月二五日伊丹発、ウィーン大学日本研究所で第九回世界クラフト会議に出席、ミュンヘン

の科学技術史博物館等で資料収集を終え、八月一〇日帰国。

。岩熊幸男助手(西洋部)は、七月三〇日成田発、コペンハーゲン大学、パリ大学等で中世論理学に関する研究調査を終え、五六年六月三〇日帰国予定。

。飯沼二郎教授(日本部)は、八月二六日成田発、北京大学、西北大学、人民公社農業試験所等で農業調査を終え、九月九日帰国。

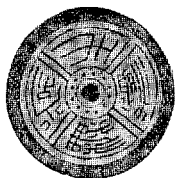
。江村治樹助手(東方部)は、九月一四日伊丹発、上海博物館、西北大学等で、中国古文字学に関する資料収集を終え、一〇月二日帰国。

。御牧克巳助手(東方部)は、九月一五日成田発、ローザンヌ大学、ジュネーブ大学等で、インド中観派思想とチベット宗

教文献研究をし、昭和五六年九月一四日帰国予定。

。桑山正進助教授(東方部)、松井健助手(西洋部)は、九月二五日伊丹発、ラッピンジ、ラホール周辺等においてタキラにおける建築、都市遺跡、宗教遺跡の調査、シアルコト城跡の調査等を終え、一〇月二六日帰国。

。竹内実教授(東方部)は、一〇月一日成田発、ソ連科学アカデミー東洋学研究所で現代中国の研究を終え、一一月三〇日帰国。



本のうわさ

河野健二『西洋経済史』

(B 6 変型判、三六〇頁、索引等付、岩波書店)



本当に困った。私は別に書評というものを、本紙一七号本欄のH氏の言の如く、「専門家同志の血刀さけての切り合い」とまでは考えていないが、普段、チンギス・ハンダのフビライだのといった、キッタハッタばかりが得意な連中を相手にしていて、「西洋」にも「経済史」にも無縁な私には、この美事な概説に切りかかるうにも、まるで何も持ちあわせていないのだから。

『絶対主義の構造』・『西洋商業史』等以来、数々の著作・編著をものされてきた著者の研究史の上で本書が一体どのような位置を占めるのか、共同研究を中心とする著者の学問的営みが本書にどのように反映しているのか、具体的に指摘することはできない。また本書と同じタイトルを掲げる

大塚久雄・高村象平・伊藤栄などの諸氏の著作と本書は学説上どのような関係にあるのか、それもハッキリとは心得ていない。しかし、本書はそのおぼつかない頭にも、平明で分かりやすく、随分と読みごたえのある本であった。

本書は、表紙カバー裏の紹介に、「種々の次元を内包して転換する社会構成体の基礎構造を問うものとしての経済史をヨーロッパに即して詳述したものである。オリエント、ギリシア・ローマ文明にはじまり、古代・中世期、産業革命期を経て、アメリカ資本主義と世界恐慌、社会主義の成立にいたるまで、時代を通して世界史に大きな影響を及ぼし続けたヨーロッパ経済の歴史が、史実に即して刻明に描き出されている」とあるとおり、西洋経済史の道筋を多くの史実を挙げて、丹念に叙述する。

かつて、僅かながら目にした『西洋経済史』と題する書物が、案に相違して、その実、イギリス経済史、とりわけ近代資本主義形成期に終始していたり、さもなければマルクス主義的経済発展論のみに依拠した西ヨーロッパ経済史であつたりして(たまにたまそういう書物にあたっただけなのかも知れないが)、聊か裏切られた気分になったことがある。しかし、本書の事実主義に基づく、バランスのとれた無理のない論述は、異和感なく、安心して読み進むことができた。特に、本文頁数の約一割を占める「序章 経済史の課題」の立論は印象的だった。甚だ私事で恐縮だが、著者の名を初めて知ったのは、十年あまり前の、高校生の時、目的としたアンリ・ピレンヌ『ヨーロッパ世界の誕生』の隣りに並んでいたという、ただそれだけの理由で購入した『思想史と現代』。昨年三月の定年退職講演の折、著者が話の枕に、「フロム・マルクス・トウ・X」という言葉をこの書の副題に考えたことがあったと話されたのを憶いだし(この講演内容は、岩波『思想』一九八〇

年七号に掲載）、久し振りに手に取って見た。そして本書を読みおえた今、『思想史と現代』では「X」であったところを、ど

うやら本書では「カワノ」と読みかえてよいのではあるまいかと、一読者として勝手に考えている。（杉山 正明）

柳田聖山『一休——「狂雲集」の世界』

（B6判、二五〇頁、人文書院）

一休の漢詩集『狂雲集』を、「その実作者が辿ったはずの、禅と漢詩の文脈で、原文に即して理解する試み」、ということだが、本書のはしがきにみえる。禅はもとより中国文学にもうとい門外漢に、この試みの壮大な意図と真の価値が、正しく測定できようはずはない。

けれども有難いことに、良書は万人に向かって開かれている。予備知識の皆無にもかかわらず、開巻ただちに引き入れられるような新鮮な魅力を覚え、一気に読了した。本書のもととなったものが、洛北のある茶席で一年間にわたって続けられた、親しみやすい講座の記録であるからばかりではない。千数十首にものぼるといわれる一休の詩偈のなから、わずか十二首を厳選

して、そのひとつひとつを克明に解釈していく著者の一休観が、いかにも確信に満ちていて、ゆるぎがないように思われるからである。

中国詩や五山文学あるいは禅についての学問的蘊蓄を傾けながらの註釈に、術学的な嫌味と煩わしさが全く感じられないのも、あくまでテキストの文目を通して、生身の一休の顔が鮮かに透視されているからだろう。ひとこと言えば、中国詩の驚嘆すべき祖述者であった一休が、禅をからめた本歌取りに熱中する頓晦と屈折の思いをときほぐし、その真意を剔抉しようとするところに、著者の真骨頂が発揮されていると思われる。

フランスの近代詩を齧っている者にとっ

て特に興味深く思われたのは、中国文学の伝統には、修身治国平天下に寄与すべきものと考えられた、表の文学としての述志の詩文と、女子供の文学としての小説や民謡、俗謡などの艶歌が併行して流れており、一休が文学史からしばしばないがしろにされる後者すなわち軟文学の豊かな世界にも、並々ならぬ理解を示していた、との指摘である。著者によれば、「艶歌は男女の情事が主題で、歴史的事実の記録というよりも、フィクション的なものである」、という。盲女との運命的な出会いを、中国の伝説、三生石物語を踏まえて歌った「住吉薬師堂」物語における、一休の私小説作家としての姿勢が、この指摘に支えられて鮮かに浮かび上がってくる。虚実の皮膜に遊び彷徨するこの一休を、例えば不実な情婦マリイ・ドーブランに呼びかけて、「ペイ・ド・コカーニュ」（桃源境）にいざなうボードレールの作詩態度と比較するとどうなるか、古今東西を問わず文学における事実と創作の複雑怪奇なからみあい、更につきつめて考えてみたい誘惑にかられる。

（宇佐美 斉）

多田道太郎『自分学』

(B6判、二〇二頁、朝日出版社)

素晴らしい軽い読み物である。どのくらい軽いかというと、活字までもが底まで下り切らずにサツと次の行へ上って来る程である。(この本の上へ詰って下方に余白の多いレイアウトに注目!)と、まあこんな下らない冗談を言っている書評にはなりません、軽くカラッと揚がった天ぷらを前にナイフやフォークを持ち出すのも野暮と言うものでしょう。(ついでながら「下らない」という言葉の語源やナイフフォーク等に関する話もこの本にはちゃんと載っているのです。)

最初に「なぜ自分の足は醜いのだろう」という小見出しがあって、本文に「女の人が教養を身につけたり勉強したいと思ったから自分が何について劣等感を持っているかを反省して、そこから出発すればいい」とあります。(私が美術史を専門にしたのは何もこのアドバイスに従ったわけではあり

ません。念の為。)ともかく多田氏は、自分の劣等感や実感に基づいた学問を人にも勧め、御自身もこの本で実践しているわけです。「なまいきな視覚」や聴覚に比べて「劣等」でより身近な感覚である臭覚・触觉・味覚を取り上げ、それらを軸に日本文化を語ろうとしているようです。そして更に話は「俗悪なるもの」「日本的醜の活力」にまで及んでいます。そこでちょっと気になるのは、多田氏御自身は、「勃興する文明の担い手」である「俗悪なエネルギ」に充ちた「庶民即ち農村出身者」とは全く違う立場にあることです。即ち多田氏は「やせ細ってゆく古い伝統的文化や美意識」の側に居る京都人であり、「心斎橋の巨大なカニの看板を見ていやだなと思うインテリ」であって、醜なるものを語る時はもはや自分の「劣等感」という情念「による切り込みは不可能で、そこには劣等感なら

ぬ一種の優越感が見え隠れしているようにさえ感じられます。しかし考えてみれば、「やせ細ってゆく古い伝統文化」の側からすれば、勃興する俗悪なものの活力に対する危惧は切実な問題に相違なく、「実感に基づく」という氏の態度は一貫していると言えましょう。

だいたい「情念」などというおぞましくも野蛮なものの自体が、本来この本とは無縁と感じられます。読者は次々に提供される豊富な話題を楽しめばよいのです。「ファシズム」「性の抑圧」等々の、決して軽くはないであろう問題に話が及びながらも、これだけサラッと仕上げる料理人の腕にはただ感服する以外ありませんが、「勃興するラーメン文化」を担う「関東の人間」の一人としては、オールドブルばかりで最後までメインディッシュの出なかった食事のよう、多少物足りない気がするのも事実です。

いずれにせよ、「少ない情報をじっくり発酵させる漬け物文化」という氏自身の京都文化評とはまた一味違う、京都の文化の一つの在り様を自ずと伝えてくれた『自分学』でありました。(宮崎 法子)

上山春平『哲学の旅から』

(B6判、二九三頁、朝日新聞社)

本書は論文として書かれたものから新聞紙上に発表された短いエッセイに至るさまざまな論稿からなっているが、ここから上山さんの哲学との出会い、独自の学問的方法を確かなものとしてゆく足どり、そして多様な領域での哲学的実践、こうした上山さんの「ライフヒストリー」を实によく知ることが出来る。そして、上山さんの学問にたいする熱情を、たとえば空海の思想をみずから修行を通して感得してきたというエピソードに見い出すのである。

本書に納められた論稿・エッセイのなかで、わたしたちは上山さんの哲学的実践の成果がどのようなものであるかを、凹形文化としての日本文化の特質を究明した「思想の日本的特質」のなかでじゅうぶんに理解することができ、また、そうした哲学の実践から出されてくる上山さんの問題意識が、ただならぬ意味をもってわたしたちを刺激してくれる。たとえば、「日本文化の

『凹形』的性格の徹底性、外来文明吸収力のすさまじさは『縄文文化』という名の自然的・反文明的な狩猟採集文化の異常な発達とかかわりがあるのではないか」という指摘や、縄文文化とともに生まれた自然宗教は、農耕文化に適応し、神道や天皇制という形をとって生きのびているという指摘などのなかに。

上山さんは日本の国家を論ずることは天皇制を論ずることだとのべているが、上山さんの天皇制研究の間口の広さや奥行きは、深さは、多様な学問領域に積極的にかかわってゆく実践的態度はもとより、それから生み出される斬新な問題意識にその理由を求めることができるだろう。そして本書の最後に載せられた戦国期の山城研究のなかに自らを日本文化や天皇制という日本の「聖地」の解明に駆りたててやまない上山さんの熱意やエネルギーを、わたし自身と対比させていっそう強く感ずる。それだけ

に、わたしは上山さんの日本国家論が、日本は一族一国家であったという日本史の悪しき観念を解体させる意義をもあわせ持つものであってほしいと願っている。

上山さんは本書のあとがきで、この本は「私の四十年にわたる哲学の旅を回顧する」とのべられているが、わたしたちは本書のリポートと題されたエッセイを読みすすむことによって、現在の上山さんの関心のあり所を知ることができる。そうした点で、本書は四十年にわたって築きあげられてきている「上山人文学」の最良の入門書であるということが出来るのである。

(羽賀 祥二)

訃報と叙勲

・天野元之助元講師(追手門学院大学名誉教授)は、五五年八月九日逝去された。

・森 鹿三名誉教授は、八月一〇日逝去された。なお同名名誉教授は、同日付けで正四位に叙せられた。

・小野川秀美名誉教授は、八月二〇日逝去された。なお同名名誉教授は、同日付けで正四位に叙せられ、勲三等瑞宝章を授けられた。

研究会の話題から

―住居における聖なる空間の比較研究班―

住居における宗教空間の研究——というのが、ここ数年來、わたしの胸裡に介在していた研究テーマの一つだった。そのために、約半年ほど、大阪大学のわたしの研究室で、研究会をかさねたことがある。

一九七八年秋から、それは当研究所に移り、テーマも「住居における聖なる空間の比較研究」と改められた。より広くなったのである。

「宗教空間」というものに、わたしが興味をもつようになったのは「町家研究」に始まる。町家は、よく知られているようにウナギノネドコといわれるほど奥のふかい住居である。しかし、それは単に奥がふかい、というだけではなく、奥行方向に「空間の節」とでもいうべき性質が展開するのだ。たとえばミセ・ナカノマ・ザシキ・ハナレなどというように。それは日常性「藝」にはじまって「晴」へと向ってゆく「空間の階梯」でもある。そしてそれらは、さらに歴史性すらもっている。入口に近い空間ほど古く、奥へゆくほど新しく形成されたものになる、というように。そこまでは、わたしもいろいろ調べて論文に発表などしてきた。しかし、その空間の形成にはどうやら宗教がからんでいるようだ、というのが

もう一つのわたしの見込みであった。というのも、町家では、たいてい、神様はナカノマに、仏様はブツマカザシキに鎮守ましますというのを、眺めてきたからだ。

そのことをいっそうはっきり示すのは、日本の農家である。農家では、仏壇はたいていザシキにおかれる。タミのあるヘヤである。ところが神棚はダイドコのようなイタノマにあるのがふつうである。大神宮にしても、八幡宮にしても、鎮守神にしても。それらはタタミノマにはまずない、といっている。そしてドマにはさらにもう一つ別種の神々がいるのだ。それはカマドの荒神さんやイドの水神さんのように、人々が自然の力を崇拜するところから生まれてきたような神々で、どこかに御本社があるというような「由緒のある神」ではないのだ。それはたぶん、原始・古代のわが国のアニミズム信仰につながるものであろう。

すると、日本の住居は、タタミノマ、イタノマ、ドマによって、三つの違った系統のカミガミを祀ることになる。これは、日本の空間形成にかかわるはっきりとした文化の影響を示すものではないか。と——以上のようなことを最初の会合でわたしは述べた。そして多田さんから、「日本の家のなかのカミサマでゾーニングできるなんて、いままで考えてみたこともなかった」という感想をいただいた。どうやら、それで合格したようで、こう

いった問題を比較文化的視点からつっこんでみよう、という研究会が発足したのである。
(上田 篤)

雑 感

—— 民国初期の文化と社会研究班 ——

例年二度や三度はあるのだけれど、昨年秋以降とくに相ついで、中国からみえた方々のお話を伺う機会に恵まれた。「四人組時代」の理不尽な出来事についての体験談や、「近代化」の遅れがもたらす害悪についての実例を伺っていると、それがあたかも事実のすべてであるような気がしてくる。もちろんこの場合、責任は聞き手の側にあるのだが。

「実事求是」「突破禁区」の方針も明らかにされた。五四運動六十周年の一昨年、中国の歴史学界でもいくつかの記念事業が試みられ、その結果は、早いものはその年のうちに、時間のかかるものでも昨年あたりから、逐次日本に伝えられてきている。当時の雑誌類や長い間絶版になっていた貴重な業績が数多く複製されつつある。また、旧官庁に死蔵されたままだったナマの史料も、整理出版される方向にあるという。いずれも、この方針実現の第一着手というところであろう。真に良いことである。民国初期の文化と社会を知るために欠かせない多くの情報も、事実の重みをのせてやってくるだろう。だが

書かれた事柄、語られた事柄のみが事実のすべてではない。また、事実がすべて等量の価値を持っているわけでもない。情報が限られている時以上に、それが氾濫している時、受け手の主体性がより問われることになる。

これも昨年秋のことだが、村田茂氏の「五四と情報」という研究発表があった。一九一九年五月四日前後の中国における海外及び国内情報の伝達経路、手段、所要日数、費用などを考察して、五四運動の実行面に関する時代的特性を求めようという異色の発表だった。そして氏は、報告の末段で、今後は歴史研究の分野でもコンピュータと研究者との分業がますます進むだろうという趣旨の「雑談」をされた。それを聞いていて、やがて研究者は資料集めの煩しさから解放されるのではないかと、バラ色の夢を見かけ、いやいやこれはバラ色ではない、とあわてて灰色に塗りかえた。コンピュータを制するものがすべてを制するという情況が、着実に普遍化してきている。情報の中央集中が完成した時、われわれは判断の可能性の幅を、実質的にどの程度まで保っていることだろうか。

民国初期は、大正初期である。中国報道にも力を注いだ大阪朝日と大阪毎日が、全国制覇を目前にしていた時期である。両紙の当時の紙面は、今や誕生祝にまできている。一方、附属図書館所蔵の時事新報や国民新聞は

傷みが激しく閲覧も困難な状態である。一刻も早くマイクロ化してもらいたいものだ。
(藤本 博生)

国民文化班の現在

—— 国民文化の成立研究班 ——

もう二十年前になるが、坂田吉雄先生の研究室には佐々木高行日記『保古飛呂比』のカードが、一部分は写真で、そしてかなりの部分は先生の手書きで置かれており、先生はそれを日課のように読んでおられたことを思いだす。その直後、わたしは大阪朝日の社史編集室へかよって『東雲新聞』の論説や記事をフィルムにとり、カード化していたが、まだ長尺のリールが本当には実用化されず、短いフィルムをつなぐのに閉口した。

現在『佐々木高行日記』も、明治十七年まではとにかく活字になり、『東雲新聞』も複製された。『自由新聞』複製版等々を数えても史料的にわたしたちの研究会は二昔前に比して飛躍的に恵まれている。一九八〇年度までは、報告発表の間に、主として『大隈文書』の史料を佐々木克氏の細密な読みを中心に継続してきたが、八〇年度には科研究費のおかげで『三島通庸文書・書類之部』を入手できたし、八一年度には『三条家文書』も購入できるはずである。

とすると、わたしたちの研究班は、直接の先行者であ

る林屋先生の「市民文化班」に比しても、史料的にずっと細密になりうるはずだし、ならざるを得ない。またその努力も今のところ、少し実りあるものには、できそうではある。しかしその反面、国民形成、国民文化の成立といった問題をどう理論化できるのか、わたし個人としては、極めて困難な課題をかかえこんで、難儀しているというのが実感だ。七〇年代は社会学の一〇年間だとい九七四年に書いたのは青井和夫氏だし、政治学会も遂にその年報を、『国家形成と政治文化』という特集にあてにいたった。ネーション・ビルディングとはペンディックスの有名な本以来の流行語だし、ポリティカル・カルチャーとは矢野暢氏がしきりに引用する『国際社会科学百科』以来の概念であるこというまでもないが、さてこのマクロの理論と微視の史学は、どう統一できるのであろうか。ライシャワー氏など近代化論者のやや大ざっぱな論はペンディックスの本のなかで日本についてふれている部分でも、決してまだのりこえられてはいない。日本人のわたしたちが、これを統一して理屈をつけていかなければならないのだが、わたしたちの班はあと一年である。しんどいが、とぼしい頭をしぼりたいと、つみあげた本を前にためいきをついているこのごろ。何分、お知恵を借して下さいと申したくなる実情を、報告までに。

(飛鳥井 雅道)

豚

豚とケント

谷 泰

ルーマニアの人は小話しが好きだという。もちろん小話し好きは、社会主義圏一般のことかも知れないが、その小話しの中でこんな話をきいた。

小学校で先生が図画の時間に、豚の絵を描かせた。するとある生徒が、豚の頭とひずめと尻尾の部分だけをかいて、「はい豚です」ともってきた。教師は「こんな豚の絵があるものか」と云って怒鳴った。すると生徒は答えた。「先生、でも豚といって、私のみたことがあるのは、この部分だけなんです」。

ちなみに豚の保有頭数は、ルーマニアが世界一である。だのに豚肉のよい部分はすべて輸出され、一般庶民が口にできるのは、まずい部分か、まずいソーセージだけである。小話しはそのことを諷刺している。ところで話は豚だけではない。一般的に云って生産物のよい部分はすべて、外貨獲得のために輸出される。代価として原

材料ないし資本主義諸国の精密機械が輸入されて、国営工場にもどってくる。工業化への飛躍的躍進、それは新聞テレビでうたわれる大合唱の基調であり、その国民的成果は、つねに着実に達成されつつあるということになっている。大人たちは、「自分らの世代は、豚の頭だけで我慢しよう。しかし子らの世代が大人になる頃には、工業化が達成され、豚の胴体がたべられるようになるだろう」と期待するようしむけられている。テレビは、こう思って忍耐している人々の願いが、報いられることを保障しているかにみえる。しかし、本当にそうなるのか。キビの粉のパンしかくえなかった農民が革命後パンがくえるようになり、すぎ間だらけの木造ワラぶき家屋に住んでいた人々が、レンガづくりの家に住めるようになったことは確かである。しかしチャウチェスクの御猟林に通ずる道路は舗装されても、村内の道路は、いづこもぬかるみのままで、いっこうに改善される気配はない。ばら色の未来に、疑いを抱いている人は少くない。

人々は、党幹部だけのショップでは、とびきり上等の輸出用の生ハムが売られている、ということを知っている。特別のコネのある者は、幹部に頼んで、それを入手することができる。豚肉のよい部分は、未来に横たわっているのではなく、頭上にある。特権の余得、それはさまざまな点に見出され、コネを通じて放下される。未来に期待するのではなく、いま頭上のおこぼれをえようとするものは、これら権力者に近づくにしくはない。ただえら

れたものへの代価は払わなくてはならないのは当然である。医者は、万人によい薬を与えるのではなく、それを控えておいて、頭上の恩恵をうけるために融通するという手段をもっている。地方官吏も、融通しあうなものかをもっている。しかし労働者や農民にはそれが無い。

ただ、かれらにも、恩恵を買う手段をうる道がないわけではない。自由主義諸国からの輸入品は尊重される。これらの品は、都会にあるドル・ショップに売られている。ただドルは一般市民に入手不能で、万一入手しても、ドル・ショップに、自ら買いにゆくことはできない。こうして一般観光客や外国人留学生が接近的となり、庶民はそれらを原価の倍近くの値で入手する。というのも、それらは呪物的効果を發揮するからだ。とりわけ煙草のケントとジョニー・ウォーカーは、政府発行の通貨とは別個に、非公式取引の通貨にさえなっている。公然と入試のための特別配慮をうけることはできない。医者に自分だけよい薬をくれとは云えない。ケントは、権力者によってとざされた公的規則の扉をあける鍵だと云われている。上から統制されているために、価値をもった煙草や酒は、こうして、権力者の余得、そして恩恵をうるための代価として、袖の下として、上方に還流してゆく。庶民はここでも権力の呪縛下にある。それはやり切れぬ経験だった。

それにしても、ケントであって、マールボロではなぜだめなのか。煙草をくれないかと云われて、マールボロ



トランシルバニア（ルーマニア）の牧夫たち

を与えたのに、それならいらないと云われたことが何回かあった。マールボロでも、使用価値は殆んど変らないのにだめなのだから、まさにケントは通貨化していると云える。貨幣成立の原初形態をみているような思いがした。ただそれは貨幣と等価物ではない。というのは、それらは、力をもつ者によって、プレスティジの表現として、吸われ、煙となって消えてゆく。だからケントは、つねに外から補給されなくてはならない。

町を歩くと、一日に何回となく厚顔無恥に「ケント、ケント」と云って近寄ってくる男たちにあう。そういう男に声をかけられるごとに、聞いて聞かぬふりをせざるをえぬ非人間的関係への強制、そして権力というもののやり切れぬ重み、そしてヤミ通貨としてのケントを、経済学者でもない私が、どう位置づけたらよいのかわからぬ焦立ちに悩まされつづけた。

海外学術調査としての牧民調査自体は、六月末から十月末まで、牧民の好意と文化評議会の関係者の協力で、それなりに知りたいたいと思っていた部分が、明らかになった。その成果は論文のかたちでやがて報告することにして、ここでは、いやが上にも重い人間的現実をみせられて、持参したVTR機材の物理的重さだけが、肩凝りの原因ではなかったのかもしれぬ、と思ったということをして旅の想い出の一つとして記させてもらった。

チヨウカンデイの墓石群

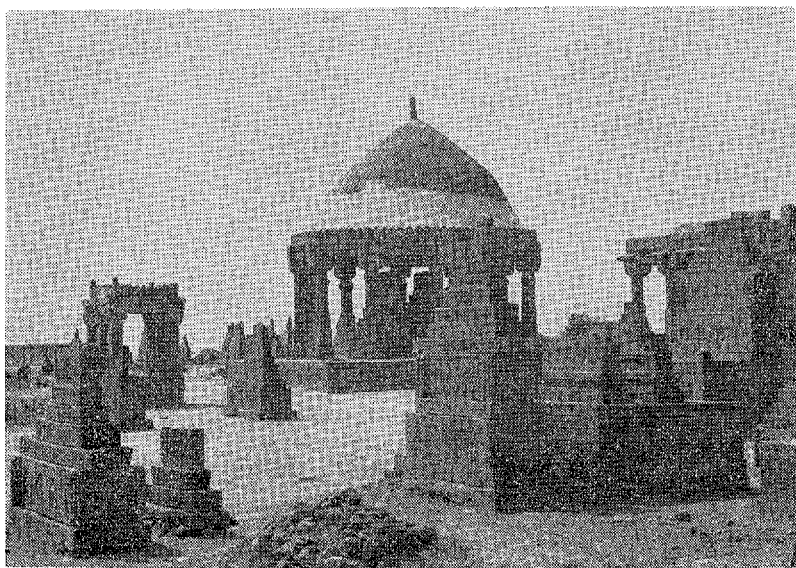
松 井 健

レヴィストロースは、そのメランコリックな回想記『悲しき熱帯』を「私は旅や探険家が嫌いだ」という言葉で始めている。その彼も、民族学者になった理由を問われると、素直に、キャンプ生活や旅行に対する嗜好をあげている。調査旅行について書くときには、いつもこの相反する気分にとらわれる。

チヨウカンデイの墓石群は、かなり長く感じられたバキスタンのカラチでの待機の時間のあとの、心躍るような、同時に幾分億劫な、初めてのシンドの郊外への自動車旅行の目的地の一つだった。この自動車旅行は、忘れかけていた事柄を、すぐにはっきりと思い出させてくれた。野外調査で死ぬような事故があるとすれば、それが何であるかということについて。湿潤熱帯地方では、ヘビが確かに恐い。アフリカのサバンナ疎開林を歩いていると、一日三〇キロメートルほどの行程で、必ず一回はヘビに出遭う。なかには、「ウー」と吠えたり、毒を遠くから眼に向けて吹きかけてくるヘビまでいる。大抵は毒蛇だから、咬まれれば数時間で死ぬだろう。サソリや毒グモでは死なないといわれているが、伝染病や風土

病はやはり恐しい。ところによってはシラミで死にそうになる（これがパキスタンの話である）。けれども、何よりも危険なのは自動車事故なのだ。元気の運転手は、二車線道路でも、対向車を発見してから平然と追い越し始める。こちらがゆっくり走っていても、追い越してくる車がセンター・ラインを越えて突っ込んでくる。それも、断固「道をあける」という意志を表わすためか、白昼ヘッドライトを点滅させながら。下り坂は、エンジンを切ってフット・ブレーキだけでころがり降りるばかり。簡易舗装の道を整備のいき届かない車で、一〇〇キロメートル近い時速で飛ばすだけでもいい加減危険なのに。

こうして二時間。ホッとして車から足を下したところがチョウカンディ。十月というのに大変な暑さ。クラクラと眼底が揺れるような明るさ。そして、一步一步足を運ぶごとに、ズボンの中の空気が、熱気球になるのではないかと思うような地面からの反射熱。四辺ほとんど草木をみない原野の中に、おびただしい数の墓が佇んでいる。きめ細かな石の板に手の込んだ彫刻がなされ、それを男女別の形に組み立てた、現代のイスラムの墓とは随分と異なる形式のものである。音もない原野のなかでこれらの墓石群を見ると、ともすれば自己肥大する死についての想念がどんどん乾燥していくように感じられる。死が、死を表象する墓石群とともに陽炎の中に溶け去ってしまう、そんなことがあるのだろうか。



コペンハーゲンの物貰い

岩 熊 幸 男

コペンハーゲンに着いて最も驚いた一つは、物貰いである。と言っても乞食などではない。名にし負う高福祉国家であるだけに、例えば中央駅をいくらぶらついてみてもそこに屯する乞食や浮浪者に出会うことは決してない。大阪駅などとは違うのである。着いた当初は、さすがはデンマークであると感心していた。

聞けば失業しても二年間かは最低生活を保証する保険金が出るそうである。(因みにその額は小生の目下受けている奨学金とほぼ同額である。)それを支えるのに国民は収入の半分以上が税金にとられる。間接税も無闇に高い。特に飲食税はひどく、いきおい外食に頼りがちな一人者としては非常に困る。なるたけ買物籠をさげて市場に出かけることになるが、毎日そんなこともしてられない。他面、町で酔払いの姿を見かけることは殆どない。パブの類はもちろん至る所にあり、よく繁昌しているが、それでもである。もっとも、酒はアルコール度に比例して税率が高くなるので、皆薄いビールで済ましているようではある。

しかしさすがに最近では、他のEC諸国の例にもれず、

この国も経済状態が悪化し、失業率も二十八%である。しかしその大半は移民であり、そういう本当に困っている人達が物貰いをしているのを見たことは一度も無い。

物貰いが出現するのは、決って中央駅周辺である。こちらが気嫌よく家路めざしてすたすた歩いている時、あるいは時に駅のミニ・バーなるものにひっかかって立飲みのビールを飲みながらぼんやりしている時、突然話しかけてくる。デンマーク語である。うろたえてデ語は解らんとこれだけはすぐ出てくるデ語で言う。すると諦めるかと思うと、うんそうかそれならば、と鷹揚に一つ頷いてやおら英語で言う。一クローネ持ったつたらくれ。始めの内は耳を疑った。堂々としているのである。愛想笑いの一つもせずはこちらの眼をまともに見て言う。時には、酒飲みたいねん、と理由を述べる。知らんがなとは思ふものの、ここまで問答してしまおうと振り切るのが難しい。あいにく持ち合せがありません、などと言うことになる。すると、なら煙草位持つとるやろ、と食い下ってくる。一箱七百元もする貴重品の煙草をやって、やっと退散してもらふことになる。こういうのは、決してまだ若い働き盛りである。十代の子供もいる。明らかに親がかりのちゃんとした身形をしながら、堂々と無心に來たりする。その度にこういう連中は一体どういう神経をしているのかと不思議に思わざるをえない。根負けして何かやった時でも、タックとも言わずに行ってしまうことが多い。

しかし老人になるとさすがに違う。こちらに来てまだ間もない頃のことであった。着古した、しかし身奇麗な身形の老人が憂い顔にやって来るのとふと目が合った。と思う間もなく“Excuse me, Sir.”と咄びかけられた。非常に恐縮の体である。“Sir.”と呼ばれるのは始めてだから驚いていると、きれいな King's English で言う。英語はお話でしょうか。実は家族の者が急病になりまして、医者に見せねばなりませんのですが、何せこの時間で（始発前の早朝であった）云々と縷々述べた。実際困っている様子である。こちらは二十四時間救急体制が完備していることを知る前のことである。あいにく私も余所者で、この辺の医者と言って全く存じませんが、とまじめに受けた。いえ違うので、旦那、医者は電話すれば来てくれるのですが、その電話代を拝借したいのですが。しばらくして、まだその辺をうろついているのを見るまでは、お人好にもすっかり信用していたものである。これ程の演技力はなくとも、たいてい、いかに失業生活がつかいか、酒も飲まずにいられないかをくさり述べたりする。老人のことである。来し方の色んな苦労がしのべられたりする。第一にこれなら了解可能である。着いた当初のまだ人淋しい頃には、よくしばらく立ち話などしていたものである。

このところ、何故かこういう古典的な物乞いは姿を消して、全く了解不能な厚顔無恥にしかでくわさない。少々さびしいことである。相場は二クローナに値上げした

ようだ。

ヨーロッパで

吉田 光 邦

八〇年は二度、ヨーロッパへ出かけた。三月はロンドンのヴィクトリア・アンド・アルバート美術館で開かれた、ジャパン・スタイル展のコンサルトメントとして。そして七月八月はウイーンでの世界クラフト会議のためである。ジャパン・スタイル展は、日本の文化を、単純さとか、優雅さとか、さてはその野性といった概念で、過去から現在に至る物とデザインを分類して展示するといふ、かなりに実験的な試みであった。開会式にはエリザベス女王も臨席されるという、大掛りな催しだったが、パチンコからオートバイ、団地の一室を実物で展示したことなどには、はじめて日本の大衆文化を知ったという、驚きの声もすくなくはなかった。尤もいわゆる日本通の人は不満だったようである。

世界クラフト会議は、ユネスコ傘下の会議なのだが、最近の国際会議と同じように、先進国と第三世界の対立が、さまざまの形で現われていた。先進国のクラフトは

かつてのアート・アンド・クラフトの運動にもみられるように、アートへの傾斜は著しい。しかし第三世界のそれは、明治の日本と同じように、むしろ産業の性格が濃い。この基本的な視角の差異が、どの分科会でもたえず見え隠れしたのである。だがヨーロッパの二、三の国がアフリカ諸国に対して、現代工業よりはクラフトの面で新しい援助を試みていることは注目せねばならぬことだろう。だがそのアフリカにおいても、輸入される先進国の文化にあこがれる新世代と、伝統に固執する旧世代の対立のあることを訴えた、ナイジェリヤの報告は印象に残っている。

会議の合間にはウイーンの多くの博物館、美術館を訪ね歩いた。かねてから見たいと思っていたサファビー朝のペルシア・カーペット——現存する古カーペットのうち、最も美しい狩猟文のある絹製のもの——もはじめてみる事が出来たし、一九七三年には日本のウイーン万博参加百年記念の展覧会が開かれていたことは意外であった。産業美術館博物館には、なお相当のウイーン万博時代の日本の展示品を蔵している。しかしその研究はほとんど行われていない。

会議のあとの小旅行でも多くの聖堂建築や地方の博物館をいくつも見た。これらにみる、ヨーロッパの人びとの歴史的な事物に対する執念、それはどこへ行ってもいつも痛感させられることである。

パークスターンの西北地方

桑山正進

七九年以来国境をこえてアフガン人が流入したことで、一躍有名になったこの地方を、こんど見てまわることができた。流入人口一〇〇万、あるいは一五〇万とい、大都市規模の人口である。さすれば、さぞかしこの地方に目で見える変化が出てよりそうなものである。遺跡調査を目的にするとはいえ、国境の両側でこれまで仕事してきた者が、この状況に無関心でいられるはずがない。

流入者はいそう多人数がかたまっていた。だいたいは耕地に接近した原野で、テント張りをするグループ、すでに半恒久的の泥家をつくるグループなどがあつた。これがインダス河東でややあらわれ、河西ベジャーワル周辺でもっとも濃い分布となっていた。しかし、どうしたわけか、彼らが現地民の生活をとりわけ圧迫している様子はない。それどころか、彼らを相手に商売する現地民もいる有様で、みるところ至って和気あいあい。以前と変つたところが感じられないのである。短期滞在だったし、意識して情報をあつめたわけではないから、深くに重大なかわりようがあるのかもしれない。そう思つても、こ

の一見平穩はなにに由来するのか。

思うに、流入者も現地民もみなおなじパシユトゥン族だからではあるまいか。アフガーニスターンには、タジークもいれば、バルーチもいる。だが、越境者はパシユトゥンだけ。タジークはもとより、パシユトゥンといってもドゥラニー系の連中など、アフガーンの土地の奥の方に居る連中は、来ていないのである。テレヴィの現地ルポにきく彼らのおしゃべりは、フールシーが下手だ。これはアフガーン・ペークの国境沿いの人間、この山地の人間が東へ移動してきたことを示している。バルチスターン山地を中心に分布する多くの部族パシユトゥンは、一九世紀にデューランド線で人為的に分断され、英領インドとロシアの南下を緩衝するアフガーニスターンとに区分されてしまった。

しかし、彼らのもつ文化は基本的なところでは同じなのである。そう考えると、この平穩さも、越境した異民族、よそ者と、現地居住民との対立といった単純な図式から予想される事態とは、まったくちがったところからあらわれたものと言えるのではないか。彼らは普段から交流があった。バヌー近くではアフガーンの土地から来た者が、ハイウェイに一膳めし屋を出して、もう永くやっているのに出会った。玄奘もいったように、ここはやはりインドの正境ではなさそうである。

お客さま

五五年九月一二日

中国科学院地理研究所

黄盛璋氏

一〇月

七日

同济大学建筑工程系講師

路秉傑氏

一〇月

二六日

中国社会科学院民族研究所研究生

張承志氏

同新聞研究所研究生

葉倫氏

一一月

一〇日

中国社会科学院文学研究所研究員

錢鍾書氏

同經濟研究所副所長

劉国光氏

一一月

四日

ハーバード大学大学院

ティムシー・ブルック氏

一一月

九日

中国科学院古脊椎動物与古人類研究所

賈蘭坡氏

同考古研究所

安志敏氏

訂正

前号八頁掲載のお客さまの中の英承明氏を吳承明氏と訂正いたします。

感銘をうけた本

(五十音順)

●今井

清 恵洪『禪林僧宝伝』

編集工房ノア

●宇佐美

美斉 大槻鉄男『樹木幻想』

青土社

清岡卓行『駱駝のうへの音楽』

筑摩書房

吉川幸次郎『杜詩論集』

筑摩書房

●竹内

実 谷川慶太郎『中国「近代化」の幻想』

ダイヤモンド社

書いたもの一覽

一九八〇年六月

～一九八〇年十一月

(五十音順、●印は単行本)

・飛鳥井 雅道

●明治大正図誌・中央道(編)

筑摩書房 六月

群を抜く権力の組織者・岩倉具視
岩倉具視

維新の道 一八号 七月
プレジデント 別冊 七月

・飯沼 二郎

国民経済の真の安定と食糧自給率
刊『産業構造の変化と日本農業』

富民協会 六月

神の怒りと神の祟り

共助 六月

●現代日本の課題・農業を考える

日本キリスト教団九州教区宣教部 六月

外国人教員任用特別措置法(案)に関連して(日高・徐編)

第三文明社 七月

『大学の国際化と外国人教員』
対談・アジアの中でキリスト者であるとは(前島宗甫と)

本のひろば 七月

桑原先生の魅力(『桑原武夫集』第四卷月報) 岩波書店 七月

La logique spatiale de l'agriculture japonaise Géographie japonaise (L'espace géographique, tome IX, N° 2) 七月

靖国神社の国家護持論で一言 毎日新聞 八月一四日
農業革命と近代農学(『新・熊本の歴史』六卷)

熊本日日新聞社 八月



食糧の安定確保と農業の発展

地域開発ニュース 一四四号 九月

三里塚と「民主」警察(総合特集シリーズ一三『現代の警察』)

日本評論社 一〇月

風土論研究の思い出

高校通信(東書「地理」) 二〇〇号 一〇月

中国農業の近代化——五つの人民公社を見て——

読売新聞 一〇月三日

朝鮮伝道に挺身した日本人の死 毎日新聞 一〇月一三日

「国産」と農民(古島敏雄編『農書の時代』)

農山漁村文化協会 一一月

●日本の古代農業革命

・上山 春平

●日本の国家像

・宇佐美 斉

詩人の変奏(『堀辰雄全集』第七卷月報)

翻訳・イヴ・マリ・アリュール「竹ものがたり」ユリイカ 七月

書評・天沢退二郎『フランス詩への招待』週刊読書人 七月

書簡集の魅力(『新修宮沢賢治全集』第十六卷月報)

筑摩書房 八月

立原道造の出發

樹海 八号 一〇月

・梅原 郁

『清明上河図』と宋の開封（『世界の文化史蹟』一七「中

国の建築」）

講談社 一〇月

唐陵と宋陵（『法帖大系』二・「淳化閣帖」月報二）

二玄社 一〇月

訃報・森鹿三博士

史林 六三卷六号 一二月

・太田 武男

⑧夫婦の法律（第三版）

有斐閣 一〇月

⑨親子の法律（新版）（太田・久貴著）

有斐閣 一二月

内縁保護の現状と今後の問題

家庭裁判月報 三二卷一〇号 一〇月

家族法の改正に関する将来の課題

別冊 判例タイムズ 八号 一二月

・勝村 哲也

漢字処理に関する研究開発（共著）

全国共 一二月

同利用大型計算機センター「研究開発論文集」二号

・桑山 正進

Fifth Excavation at Tapa Skandar. *Japan-Afghanian Joint Archaeological Survey in 1978* Kyoto University, 1980 六月

⑩『インダス文明——インド文化の源流をなすもの——』

（共著）NHKブックス三七五 日本放送出版協会 一〇月

書評・深井晋司著『ペルシア古美術研究』 第二卷

オリエント 二三卷一号 一〇月

・阪上 孝

計画の觀念とテクノクラートの形成（河野健二編『ヨーロッパ——一九三〇年代』）

岩波書店 八月

・佐々木 克

書評・毛利敏彦『明治六年政變の研究』

日本史研究 二一四 六月

徳川慶喜（プレジデント版『坂本龍馬』）

柏書房 八月

・竹内 実

武田泰淳の中国体験

国文学 六月号 争鳴 三一号 六月

江南の春

対談・中国とどうつきあうか

ホンコン人

東洋経済 六月七日号 京都新聞 七月十九日

⑪友好は易く理解は難し

維文と文芸民主について、わたしも一言（争鳴原載訳文）

対談・毛沢東批判再燃か

翻訳・破棄された犯罪ファイル

広州に詩人を訪ねて

大正期における中国像と袁世凱評価（守川正道訳・チェン

『袁世凱と近代中国』解説）

広州見聞

新行儀読本

読売新聞 一〇月四日〜二十六日

中国の動向

京都新聞 一〇月七日

巨大な空間・幾重もの殻『世界の文化史蹟』(一七)

講談社 一〇月

・多田 道太郎

●ことわざの風景

講談社 七月

●著 る

平凡社 八月

『奇妙な旅』を読む(河野健二編『ヨーロッパ』一九三〇年代)

岩波書店 八月

醍醐寺『探訪日本の古寺』(七)

小学館 八月

うしなわれた旅『日本名所図絵』(月報)

角川書店 六月八月

食の文化『食の文化』

講談社 九月

ことわざの知恵(『LDノート』)

総合労働研究所 九月より毎月二回

・田中 淡

●中国の古建築(共編『世界の文化史蹟』(一七) 講談社 一〇月

・谷 泰

牧畜社会研究の諸問題(座談会) 季刊人類学11-2 六月

樋口勝也ほか『カルチュアショックの現場から』(コメント) 季刊人類学11-2 六月

季刊人類学11-2 六月

牧畜の食(石毛編、伊谷ほか共著『人間、たべもの、文化』)

所収)

平凡社 一一月

・富谷 至

翻訳・任継愈『中国仏教の特徴』

仏教史学研究 二二巻二号 三月

白虎観会議前夜

史林 六三巻六号 一一月

・中村 賢二郎

中世後期・近代初期ドイツの楽師(中村賢二郎編『前近代に

おける都市と社会層』)

京大人文研 一〇月

・羽賀 祥二

和親条約期の幕府外交について

歴史学研究 四八二号 七月

・狭間 直樹

大塚有章先生のこと

学院ニュース 一五八号 九月

●東アジア近代史研究(共著)

仏教大学通信教育部 一〇月

・林 巳奈夫

歐洲博物館所見の中国古代青銅器若干について

甲骨学 一二号 八月

『儀礼』と敦

史林 六三巻六号 一一月

・樋口 謹一

一九三〇年代のイギリス外交(河野健二編『ヨーロッパ』一九三〇年代)

岩波書店 八月

翻訳・ルソー『エミール』上(ルソー全集)

九月

・福永 光司

鬼道と神道と真道と聖道——道教の思想史的研究——

思想 六七五号 九月

京都と宗教文化

夕刊京都 九月六日

私と書

書友クラブ 一一月一日号

日本の古代史と中国の道教(陳舜臣『中国の歴史』第一巻)

付録「研究ノート」)

平凡社 一月

・前川 和也

“Female Weavers and Their Children in Lagash-Pre-Sargonic and Ur III-”

Acta Sumerologica No. 2 (1980), pp. 81-125.

“Animal and Human Castration in Sumer, Part II: Human Castration in the Ur III Period.”

Zinbun 一六号 六月

・松井 健

Studies in Ryukyu Folk Biology: Part I Ethno-conchology of the Ryukyu Archipelago

Zinbun 一六号 六月

書評・J・スベイン著『シルクロードの謎の民——パタ

ーン民族誌——』

歴史公論 六卷六号 六月

乳製品と遊牧民——アフガニスタンのパシュトゥン遊牧

民を中心——

専門料理 九号 九月

・見市 雅俊

二つのイギリス(河野健二編『ヨーロッパ——一九三〇年代』

岩波書店 八月

・柳田 聖山

今月のことば

花園 六月——一月

禅語コーナー

同 右

●祖堂集索引 上冊

京都大学人文科学研究所 三月

土曜随想七——〇

中外日報 六月——七月

臨済と道元(講座『道元』六)

春秋社 六月

純禪の道を求めて

別冊太陽三一 平凡社 六月

●一休・狂雲集の世界

人文書院 八月

水上文学と仏教

国文学二十五の十一 学燈社 九月

栄西と寂室(中世の瀬戸内、第五回)

山陽新聞社 九月

『禅論』のころ(『古田紹欽著作集』月報二)

講談社 一〇月

●臨済録抄書集成(禅学叢書之一〇)上下二冊

中文出版社 一〇月

再掘日本宗教史、道元——一六

中外日報 一〇月——十一月

無功德(市川高等学校創立二十周年記念)

近江文化社 十一月

●近江の禅林・永源寺(枯禅の谷)

法蔵館 十一月

禅と浄土(図説『日本仏教史』二)

読売新聞 十一月二日

一休と現代

青土社 十一月

『十牛図』の人間学(『現代思想』臨時増刊)

大東出版社 十一月

敦煌仏典と禅、総説(講座『敦煌』八)

金沢文庫研究 二六四号 十一月

鎌倉の道元

山下 正男

●思想の中の数学的構造

現代数学社 九月

書評・村上陽一郎『科学と日常性の文脈』

科学哲学13 十一月

●山田 慶児

中国の社会思想(『経済学大辞典』第三卷)

東洋経済新報社 九月

●T・I・ウィリアムズ編『技術の歴史』11(訳編)

筑摩書房 九月

●横山 俊夫

好人愛樹——前近代日本の都市空間の一極相(中村賢二郎

編『前近代における都市と社会層』 京大人文研 一月

“Mitford and Murata: two minds critical of Japan and Britain's respective popular images of each other in the early Meiji Period”, *Proceedings of the British Association for Japanese Studies*, vol. v, part one, “History and International Relations”, University of Sheffield. 十二月

・吉田光邦

祇園と外国人

奇なる行為

●イスラム(改訂版)

祇園祭

●中国の構図

人間・機械系の世界

伊勢型紙

●京鹿の子(編著)

歴史と信仰の山

寛政千二百

鉄砲革命 プレジデント『織田信長』

観光と産業

ペルシアじゅうたん

現代染織考

読書日記

現代のエスプリ

曼珠院

技術史の一断層 三省堂ぶつくれつと 六〇一月

・渡部 徹

全国水平社・部落解放運動

きょうせい『現代百科中事典』 五月

先任権導人による雇用拡大と不正是正を提起せよ

労働調査時報 七〇〇号 五・六月合併号

鈴木市蔵さんに答える

運動史研究会「会報」一四号 六月

特高・留置場・軍隊(上)―戦時下の奇異な体験

全協をめぐる若干の問題

推せん文・大庭伸介『浜松・日本楽器争議の研究』(五月社) 九月

推せん文・複製『出版警察報』(竜溪書舎) 一〇月

米騒動・新人会『現代マルクス・レーニン主義事典』(上) 十一月

社会思想社